

住めば都。
色々な魅力にあふれた街。

暮らすということは、その土、空気、人間関係、道や公園など、様々な条件と結びつくことになる。人によっては公共交通機関や病院、あるいは学校との距離などによって、また

はある人は海が見える、山があるなどの景色で、あるいは税金が高いか安いか、行政のサービスが良いか悪いかで判断する人もいるだろう。飯能という街は、これらの諸条件はどうなのであろうか？

深く考えたことはないが、都会に近いこともあり、古い田舎臭さと共に都会の匂いもある街かと思う。私は名栗の山の中に生まれ育った田舎者だが、東京での生活が約15年ある。といってもやはり、新緑や紅葉など山の四季が織りなす景色の方が好きである。鎌倉期以降の歴史も多くあり、歴史散策に興味がある人にとっても良い場所だ。いざ鎌倉の鎌倉街道や大山街

道などの面影が残っているのも面白いし、阿寺の諏訪神社の建物や獅子舞、下名栗の諏訪神社の獅子舞、中山の館跡と中山家の歴史などは今との関わりもあり興味深い。吾野地区や名栗地区、谷あいや山の上の方に暮らす人々の長い歴史を考えてみるのも楽しい。また、飯能は森林地域の面積が市全体の76%と、日本の平均より10ポイントほど高く、森林日本の中でも森林の町と言える。しかも、その森林には杉や桧がほとんどの面積に植林され、多くは十分に成長し、出番を待っている。戦中・戦後の植林時代、その後の育林の時代はもはや過去となりつあり、これからは活

の時代だと考えながら暮らす毎日である。



岡部素明さん

岡部税務会計事務所長。多忙な業務の傍ら、地域の多様な活動にも参画。その旺盛な好奇心と多角的な観点が仕事に活きる。駿河台大学客員教授・森林コーディネーター、埼玉県税理士協同組合副理事長、NPO法人飯能市体育協会副会長、飯能市エコソーリズム推進協議会議員。

編集後記 いいことあるかも

- 特集の南小畔川。どういうわけか、どんどん拍子に取材が進み、原稿もどんどん書き進められました。言うなれば、大きなパワーに導かれるように：この調子で次の号も出していきたいと思います。（右）
- 中山の古地図！今回も意外な発見で驚きました。これまでに生まれ育ち40数年。日々変わりゆくまでも、消えていくもの、また新たに生まれるもの。時代の流れに身をゆだね漂う。やっぱ飯能は「いいね」になりました。オヤジ発のステキな飯能のふうふを届けられたらと思います。（左）
- このまちに生まれ育ち40数年。日々変わりゆくまでも、消えていくもの、また新たに生まれるもの。あるから+（プラス）に参加させていただくようになりました。オヤジ発のステキな飯能のふうふを届けられたらと思います。（左）
- 貴重な資料をご提供頂き、感謝しております。（黒）
- あるから+（プラス）に参加させていただくようになりました。オヤジ発のステキな飯能のふうふを届けられたらと思います。（右）

サポーター募集

■「あるから」は、飯能・日高周辺の歴史・文化・生活・地場産業を超一口カルなアプローチで紹介する小さな冊子です。本誌は広告を取らずに発行しています。資金面・制作面でご協力いただけるサポーターを求めております。

■当冊子に関するご意見・ご感想を下記までお寄せください。

●ご協力

医療法人社団水野クリニック、岡部税務会計事務所、株式会社三協建設、小崎工業株式会社、名栗温泉大松閣、森計理事務所、有限会社西武設計（五十音順）

発行／制作：あるからプラス

企画・執筆／石井 茂 TEL&FAX.042-973-4004 mail@ishii-design.info
グラフィックデザイン／黒田 靖 TEL.042-973-0272 iy9y-krd@asahi-net.or.jp
印刷協力：株式会社 文化新聞社 TEL.042-973-2525

もう一つの飯能

中山

もっと昔、「飯能」は村に過ぎず、
「中山」に町があつた！

みつけた！

地域探訪

飯能の繁華街といえば、飯能駅・東飯能駅から飯能河原へと至る通称「まちなか」と呼ばれているエリアである。昔から市が立ち並び、山の物資を町へ、町の品物を山へ送る中継地のような役割を担つてきした。河川舟運が中心だった江戸後期から明治にかけては入間川の飯能河原周辺に要所ができ、明治の終わり、武藏野鉄道が敷かれるようになると、その中心地は飯能駅周辺へと移つていったのである。

それではそれよりもっと昔の飯能はどうだったのか。現在の繁華街の付近は周辺の村のつに過ぎなかつたようである。それならば、中世から栄えていた帶はどこか。当地における有力武将である中山家の居館地であり、江戸中期元禄の頃まで陣屋が置かれていた中山町であった。今その地に行つてみると、新興の住宅地に混じつて「中山家範館跡」や「中山信吉の墓」、中山家の菩提寺である「智観寺」などの史跡を訪ねることができる。

辺りの特徴は、北側に丘陵を背負つているところである。どこを歩いても、北へ向かうと豊かな森の中に入つてしまつ。常に守りを固めなければならぬ戦国の武将からすれば、南側に広がる台地を見渡すことができるこの場所は、好都合だつたに違いない。丘陵から発する水源にも恵まれていることから、武芸の鍛錬に励みながら農業を営むにはうつづけだつたと言えよう。また、早い時期から、中山には家並みが続いた集落があり、定期市が開かれていたようだ。どのようなものが取引されていたかは定かではないが、中山氏のもとに人が集まり、流通の便といつよりも政治的な都合を持つてここが栄えていた。

どこなく中世の匂いがする。

この地にあつた隆盛の手掛かりを探そと、あちこち訪ねまわつていたら、「武州高麗郷中山村繪図面」と名が付いた現代で言えばイラストマップのようなものを見つけた。話を聞くと、地元の旧

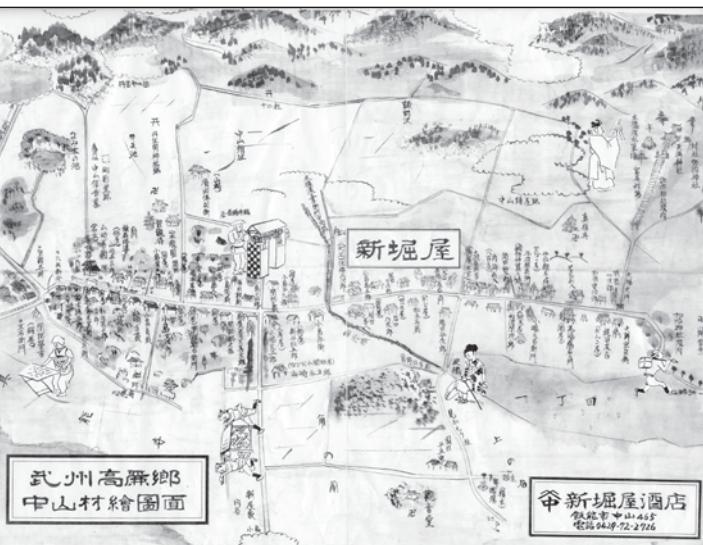
家である新堀屋酒店さんが使っていた包装紙だという。ずいぶん手が込んでおり、昔の人ゆとりと遊び心を感じられる。描かれているのは、中山氏が活躍した時代からすればかなり後の世のもの。にぎわいが飯能町に移りつづつあった明治の頃ではないかとのことだ。それでも、織物仲買、八百屋、魚屋、酒屋、だんご屋、飴屋、たばこ屋、質屋、小間物屋のほか、紙屋、油屋、綿屋、紺屋、杵屋、桶屋、帳屋、四つ目屋などといふ

この地にあつた隆盛の手掛かりを探そと、あちこち訪ねまわつていたら、「武州高麗郷中山村繪図面」と名が付いた現代で言えばイラストマップのようなものを見つけた。話を聞くと、地元の旧家である新堀屋酒店さんが使っていた包装紙だという。ずいぶん手が込んでおり、昔の人ゆとりと遊び心を感じられる。描かれているのは、中山氏が活躍した時代からすればかなり後の世のもの。にぎわいが飯能町に移りつづつあった明治の頃ではないかとのことだ。それでも、織物仲買、八百屋、魚屋、酒屋、だんご屋、飴屋、たばこ屋、質屋、小間物屋のほか、紙屋、油屋、綿屋、紺屋、杵屋、桶屋、帳屋、四つ目屋などといふ

会うことは難しいが、この絵図からは中山にあつたであろうにぎやかさが伝わつてくる。

話は変わるが、中山の鎮守である加治神社は、中山氏とのつながりも深い。南側に広がる斜面が気持ちよく、子どもたちの良い遊び場となつていて、加治神社は親しみを込めて「天神様」と呼ばれている。ちょうど前まで、この天神様のお祭りににぎやかさは、「飯能まつり」に匹敵するほどで、あつたそうだ。山を背景とした鎮守のお祭りは、この地を興した一族に思いを馳せる、「もう一つの飯能」を象徴する行事として、住民の記憶に残つていて。

表記があり、日常品を取り扱う様々な店が軒を連ねていることがわかる。それにしても何でも揃っている。四つ目屋といふのは、今風にいえばアダルトショップ。隠居なんていう表記も見られる。江戸の町を思われる粹な町内だったのだろうか。今となつては当時を知る人に



この絵図面は、智観寺に保存してあった地図をもとに起造された。
町おこしの意図を感じずにはいられない。

ハンバーガー片手に 歴史散歩。

「歴史と花のまち 中山」に国道299号のバイパスが通つた。バイパスの開通とともにオープニングしたのが、ファーストフード店や大型スーパー・マーケットである。地域の個性に即結び付くものではないが、人の流れが乏しかつたエリアに、きれいに整備されている「桜の森」。



「ハンバーガーを食べたら、歴史散歩をしてみよう。」で良いではないか。もう少し足を伸ばして、ボランティア有志が整備したという「桜の森」まで歩くのもいい。第二天覧山からは飯能の町並みを見渡せる。



智観寺



中山家範館跡



中山通り

風土を感じられるまち

特集

南小畔川

この辺りの地形をどう表現したらいいのだろう。山であるには違いないけれど、山地、山岳と呼ぶには、それほど険しいわけないし、山麓という感じでもない。山の近くにあって、人が集まっていることから山里という言い方もできるのかかもしれないが、これは地形を言い表す言葉ではない。

飯能の市街地はなだらかな丘陵に囲まれている。北は高麗丘陵、南は加治丘陵・阿須丘陵である。広く眺めれば奥武蔵の山地へとつながっていく場所であり、いくつかの丘陵の間に、川の流れとともに開けたエリアである。

Minami Koazegawa



幸せな出会いから
しぶり出されるお酒。

市街地を北へ向かうと、わずかずつながら高度を増していき、高麗丘陵に突き当たる。南小畔川（みなみこあざがわ）は、その高麗丘陵から浸みた水を集めてできた小規模な川である。高麗丘陵の南斜面は、当然のことながら飯能側にひろがり、周辺では、現在も宮沢湖から引き入れた水で稲作農業が営まれている。歩いてみて感じられるのは田園風景のびやかさ。土地改良により、小さな車が入ることができる農道が造られている

のだが、そこから見る風景は、平らな土地がわずかしかない飯能のものとは思えない。
とある田んぼで、稲刈りイベントがあるというのでおじゃました。イベントの主はここで酒造りのための米作りをしている「苗俱楽部（ひとなえくらぶ）」。同俱楽部は市内の「丸屋酒店」の女将・井上七恵さんが仕掛けているもので、会員らは米作りから蔵元での酒造りに参加し、自らが手をかけて造った酒を楽しむ。酒造りも、市内の造り酒屋「五十嵐酒造」が担当し、何もかもが地場産というところにこだわりがある。



一苗俱楽部・井上さん、鈴木さん親子

田んぼの管理を任せられているは、元農家の鈴木社（さん）とそのお母様の恭子さん。先代は主に山林苗を作ついたが、土地改良のタイミングで稲作に切り替えた。そうした際に出会ったのが、市内で田んぼを探していた「苗俱楽部」だった。半年以上かかる米作りを「プロ」として支えるとともに、田植えや稲刈りなどのイベント時には作業指導を担つていている。「素人ばかりを相手に、めんどうをおかけしています。」と七恵さんが言えは、「この会があるからやつて来られた。」と恭子さんは、感謝の気持ちを口にすら。鈴木さんは「苗俱楽部」の米作りをサポートするかたわら、当会会員を中心にお米を直販するよくなつたのだ。恭子さん曰く「無」で人と接するのが苦手だった息子が、皆さんと交わるなかで成長できた。「この出会いは、幸せな出会いだったといつていいようだ。

それぞれの思いを胸に、
この土地と向き合う。

以前は小さな田んぼが棚田のようになっていたという。それが今のように整然とした田んぼになったのは、土地改良が為されてからなのだそうだ。詳しい経過は承知しないが、土地改良のための組合が作られ、小規模に行つていた稲作農家をまとめなけ

れば立ち行かない過去があつたのだろうと推測される。その実益のひとつは、田植え機やコンバインのような大きな機械が田んぼに入れるようになつたことである。

午後にも稲刈りをされる方がいらっしゃると聞き、出向いてみると、作業者は、鈴木さんの仲間で、2年ほど前、退職後に米作りをはじめたという綿貫幸進さん。出身地は

東北の南三陸町。若い頃、こちらに出て来られ、それからはずつと勤め仕事。いわゆる高度成長期を担つてきた世代と言える。ご実家は農家であり、子どもの頃、農作業を手伝わされたが、なじめなかつたという。その幸進さんが年齢を重ね、自らの意志で農業をはじめたのだ。震災・津波により、ご実家の田んぼはほぼ全滅、ご親族も亡くなった。さまざま思いが重なり、今はここで農業に打ち込む毎日である。

今日はよほど稲刈り日和なのだろう。幸進さんにお話を伺つた帰り、稲刈りを手伝う少年に出会つた。夕闇が迫るなか、大人に交じり熱心に作業する姿は感動的ですらあり、その場で取材の約束を取り付け、翌日もその田んぼへと向かつた。

身体が大きくて、昨日見た時は中学生が高校生と思つてたが、聞いてみるとまだ小学6年生だという。名前は綿貫裕文くん。ヒロくんと呼ばれている。彼が農作業に興味を持つようになったのは、3歳の頃から。おじちゃんに連れられて、よく田んぼに来てたそうだ。その後、土地改良を経て、後継の問題が取り沙汰されるなか、ヒロくんのお父様である由夫さんも、お勤めしながら田んぼを手伝うことを決めている。ヒロくんはそうした環境の中で育ち、自分が樂しいと思うことを追つかけた。なかでも

関心を持ったのは農器具だそうだが、おじいちゃんもやった耕運機がおもしろくて仕方なかった。ちょうど同地において機械化が進む時期と重なり、子どもながらに農業の未来を感じていたのかもしれない。ゲームなどの遊びもちろん好きだが、NHKでやっている園芸番組のテレビも見ているそこで、「こちら方面の知識もかなりのもの。農繁期の土日はほぼ毎日田んぼへ出かけるほどで、小学校の先生からも「目置かれている」「うちが手掛けた田んぼは息子が手伝わなければ、やりきれないほど」と由夫さんは何とか誇らしげ。今となつては、次くことのできない戦力となつているようである。

渡来人か選んだ風土

南小畠川周辺が農耕に適した大河であることは今によじまつた話ではない。丘陵から流れ出た雨水が小さな川を形作るのであるが、その規模の小ささゆえに水を引くのが容易で、いにしえの人々を持ってしても農耕を可能にしたのである。飯能の北部、東部精明地区の平松から菖薙周辺では、奈良時代初期の遺跡が出ている。それも、けつこう大規模な遺跡で、弥生時代から古墳時代までの長期間人がまとまって住んだ形跡が途絶えていた飯能の地に、再び人が戻ったのである。

大切なのは、歴史や風土を活かす知恵。

こうした状況について、「高麗郡建郡1300年記念事業」推進の中核的な役割を担っている、高麗神社の見解を聞いてみたいと思った。高麗神社に電話をかけて趣旨を伝えると、こちらの素性も聞かず、取材OKの返事。関心のあるテーマであったに違いない。

こちらのプロファイルと、当方で発行している小冊子の概要をお伝えして、すぐさま「飯能市にも、同時代の遺跡が発見されているのに、説明看



きわめてユートラルで建設的な返

あるといふのである。
きわめてユートラルで建設的な返

高麗郡が設置されて1300年を
迎えるにあたり、歴史を再認識した
がら、地域の発展に役立てようと行
つているもの。特産品のチャリティーバ
ザール、出前講座、歴史ロマン小説の開
発、ロゴマークの開発、高麗郷おもてなし
隊など、多彩な活動を行なっている。

**昔からここに
あつたようでもある。**

南 小畔川からすぐのところにあるレストラン。畠の中にはつんと建つ佇まいは、イタリアの農村にあるようなアグリな雰囲気。店名は、野良仕事の「ラ」から。オーナーの森富美之さんは、ご実家の畠があつた場所に建てたのことで、森さんは、南小畔川周辺で子どもの頃から遊びまわっていたという。不便な場所への出店を最初は心配したというが、「口コミですぐ人気店に。ご実家で作られた新鮮野菜が、食材として使つていて。



てきた際の住み跡であるとされてい
る。

いた渡来人が派遣された。このうちのつが高麗郡建郡であり、日高市全域と飯能市的一部が郡域とされる初代郡司に就任したのは、日高市の高麗神社にて祀られている高麗王若光（こまのきしじやうこう）。古代、朝鮮半島を中心に繁栄した高句麗の王族である。異国之地から来た技術者集団は、ゆるやかにひろがるこの地（日高市側の遺跡は小畔川周辺）を次なる故郷と定め、大変な覚悟とともに土着していくことであろう。

遺跡周辺の現況

飢能のものは思えなし 牧歌的風景。

テーマとした南小畔川に話を戻そう。前述したように、この辺りの風景は牧歌的で心地よい。少し歩いて高麗丘陵に登れば、飯能の市街地方面が見渡せるなど、なかなかよいのである。そんな自然の景観を活かそうとボランティアで散策路や公園を整備されている個人やグループがあつたり行政でも健康づくりのためのウォーキングコースとして活用を試みているところが…である。この帶には高麗郡に関わる遺跡があり、それが

2016年(平成28年)で、この高麗郡が設置されちょうど1300年となることから、関係者や有識者による「高麗郡建郡1300年記念令事業」が展開されている。この地にある歴史文化を眠らせてしまうのではなく、長期的な視点にもとづいて地域に活かそうとするのが目的だ。日高市では、まちをあげての取り組みとなつており、B級ご当地グルメでは



飯能自然步道

コラボの使いつけ